**全校児童七割が死亡、大川小学校の悲劇**

東日本大震災の津波で全校児童一〇八人の七割に当たる七四人が死亡、行方不明となった宮城県石巻市大川小。北上川をさかのぼった津波は河口から四キロの距離にあった大川小を襲い、教職員も当時学校にいた一一人のうち一０人が死亡、不明となったほか、学校に避難していた住民にも多数の犠牲者が出た。児童のうち、当日欠席していた一人を除く七三人は学校による避難誘導中に被災したとみられ、学校管理下で児童が犠牲になった事例としては戦後最悪の被害とされる。

あの日、あの時、学校と地域で何が起き、人々はどう行動したのか。河北新報社の取材に応じた児童や保護者、住民らの証言で、地震発生から津波襲来までの五一分間をたどる。

**午後二時四六分～三時三七分**

大川小五年生の只野哲也君（一一）たちの教室では、帰りの会が開かれていた。午後二時四六分。声をそろえて「さようなら」と言いかけた時、揺れは襲ってきた。突き上げるような縦揺れに、横揺れが続いた。ガタン、ガタン。物が倒れる音が響く。「机の下に隠れろ。机の脚を持つんだ！」。先生の声に、哲也君は机の脚を自分の脚で押さえようとしたが、「まるで体が回るようだった」。

長い揺れが収まると、児童たちは校庭に避難し、学年ごとに並んだ。靴下のままの子、上着を着ていない子。おびえて泣きだす低学年の女の子もいた。

「大津波警報が発令されました。早く高台へ逃げてください」。午後二時五二分、石巻市河北総合支所の職員が防災無線で呼び掛けた。校庭のスピーカーからも聞こえた。哲也君の記憶では、スピーカーが鳴ったのはこの一回だけだった。

先生や地域の人たちは輪になり、何かを話し合っていた。指示を待つ子どもたちの列は徐々に崩れ、それぞれ小さな輪になって話し始めた。哲也君たちのグループに、涙を流している男の子がいた。「大丈夫だぞ」「こんな所で死んでたまるか」。みんなで口々に強気な言葉で励ました。近くにいた六年生の男子は「山さ逃げた方がいいんじゃね」「早くしないと津波来るよ」などと担任に訴えていた。

この間、校庭の一角では先生が児童と保護者の名前を照合し、引き渡していた。哲也君の母しろえさん（四一）も哲也君と三年生だった妹の未捺さん（九）を車で迎えに来た。

忘れ物があったのか、しろえさんはいったん自宅に戻ることになった。「おっかあ、ヘルメット持って行って」。母を案じた哲也君は自分のヘルメットを渡そうとした。しろえさんは「危ないから、自分でかぶっていなさい」と受け取ろうとしなかった。

「すぐ戻るからね」。二人の最後の会話となった。

「整列して。これから三角地帯に避難します」。先生の指示で、児童は新北上大橋たもとの堤防道路（通称・三角地帯）に向かって歩き始めた。海抜一メートル前後の校庭より六、七メートル高い場所だ。直線距離で約二００メートル。なぜか釜谷交流会館の前を通り、住宅地を抜ける遠回りのルートが取られた。「山に登れるのに、何で三角地帯なのかな」と哲也君は思った。

高学年を先頭に、低学年が続いた。「津波が来ているから急いで」。途中、教頭の声をきっかけに、みんな小走りになった。住宅地を抜けて県道を曲がった時、新北上大橋に波しぶきがかかるのが見えた。黒い水が堤防を越えて来た。

がくがくと脚が震えて動けない。「授業中に寝ちゃって、夢を見ているのかな。でも、こんな長い夢はないよな」。次の瞬間、右脚が動いた。振り向き、裏山を目指して駆けだした。

列の後ろにいた低学年の児童は、哲也君たちが走ってきた理由が分からず、きょとんとしていた。腰を抜かしたり、四つんばいになったりしている友達や先生の姿も目に入った。その中に柔道仲間の六年生の男の子がいた。「行くべ」。襟を何度も引っ張ったが、立ち上がれない。水の塊が近づいてきた。

懸命に裏山をはい上がった。三メートルくらい登ったところで「後ろから誰かに押されているような感じがした」。津波だった。頭から水をかぶると同時に、必死で木につかまった。土の中に押し込められるような激しい衝撃とともに、気を失った。

「てっちゃん、大丈夫か」。同級生の男の子が土をかき分け、助けてくれた。男の子は左手を骨折していた。津波にのまれたが、浮かんでいた冷蔵庫の中に入って、裏山にたどり着いたという。「助けてください。公民館があった場所の後ろの山にいます、助けて」。哲也君は震えながら、声を張り上げた。同じ裏山に避難していた大人たちが声を聞きつけ、来てくれた。雪をしのぐため、竹やぶに移動することになった。哲也君はこの時初めて、足に力が入らないことに気づいた。「はってでも歩かいん」。おじさんに励まされ、何とか竹やぶに着いた。その日は山で一夜を明かした。

避難所で父英昭さん（四０）と再会できたのは、三月一三日だった。「いつも強いおっとう」の涙を初めて見た。大川小にいた児童で、助かったのは四人だけ。津波は友達だけでなく、母と妹、祖父弘さん（六七）を奪っていった。

哲也君は津波にのまれた時、顔に大けがをして、しばらく物が二重に見えたほどだった。でも、しろえさんが「かぶっていなさい」と言ったヘルメットに守られた頭は無事だった。「おっかあが守ってくれた」。そう信じている。

**午後三時三０分～三七分**

　大川小が立つ石巻市釜谷地区に住む高橋和夫さん（六三）の自宅は北上川沿いを流れる富士川の堤防近くにあった。揺れの直後、外へ出ると、近くの畑からぶくぶく泥水が湧いていた。「宮城県沖地震の時と一緒だ」と思ったが、津波が来るという危機感はなかった。家に備え付けの防災無線は鳴らず、大津波警報は知らなかった。

「おい、堤防から水越えてるぞ。津波じゃないか」。午後三時半ごろ、近所の人の叫び声が聞こえた。北上川からあふれた泥水が高さ約四メートルの堤防を越え、並行する富士川に流れ込んでいた。みんな慌てて車に乗り、避難を始めた。高橋さんも軽乗用車で堤防沿いを飛ばした。「逃げるならあそこしかない」。目指したのは大川小の裏山だった。

県道沿いの住宅地では、まだ多くの住民が外で世間話をしていた。「逃げろ！津波が来るぞ！」。窓を開けて怒鳴る高橋さんに、顔見知りは「大丈夫」と笑顔で手を振った。「危険と受け止めてくれる人はほとんどいなかった。みんな、津波が来るなんて想像していなかったんだ」

裏山まであと少しのところで、いとこ夫婦が釜谷交流会館の方から来た。津波が来る方へ向かっていく。「駄目だ、戻っちゃ駄目だ」と説得したが、「家におばあさんがいるんだ」と応じない。引き留められなかった。

裏山に着く寸前、校庭に子どもたち数十人の姿を見た。釜谷交流会館の前にも十人ぐらいいる。「何でまだここに」。裏山のふもとに車を止めて降りた時、背後から「ドーン」と重い響きが聞こえた。振り向くと、家が壊れるバリバリという音と、煙のような黒い壁が迫ってきた。「上がれ、上がれー！」。山に向かって走りながら叫んだが、みんな次々と水にさらわれていった。高橋さんも後ろから、津波の気配を何度も感じた。追い付かれまいと、斜面をはい上がった。振り向くと、眼下には水にのまれた集落が広がっていた。辛うじて見えた校舎の屋根にはがれきが乗っていた。呆然と立ちつくした。

しばらくして、助けを求める声が聞こえた。声を頼りに山沿いを歩いていくと、がれきだらけの泥水の中、木の枝をつかんで懸命に耐える女性や子どもの姿があった。「今助けてやっからな」。まず大川小一年生の女の子に手を伸ばした。水に落ちながらも、やっと手をつかみ、周囲のがれきでけがをしないよう、そっと引き寄せた。その後も五、六人は助けただろうか。校舎側の斜面でも、波に運ばれてけがをした中学生を救助した。

雪は本降りになり、みんな唇は紫色で震えていた。「ここにいたら凍死する。竹やぶに移動しよう」。全員が高橋さんに従った。別の場所で助かった只野哲也君や石巻市職員らも合流した。

救えない命もあった。川から内陸へ流されながら「助けてー」と叫ぶ子どもたちがいた。声の方向に目を凝らした。流れが急な上、がれきや建材に阻まれて姿が見えない。声は次第にか細くなり、遠ざかっていった。「自分一人ではどうしようもなかった。でも、助けたかった」。高橋さんは涙を浮かべた。

（河北新報社編集局『再び、立ち上がる！　河北新報社、東日本大震災の記録』筑摩書房より）